図書館理事会制度に関する一考察

森　　耕　一

A Historical Overview of the Library Trustee

MORI Koichi

1. はじめに

公立図書館は，「住民のために住民によって運営される民主的な機関」[1] であるとされる。公立図書館は，各人の「職業，宗教，階級，民族にかかわりなく，地域社会の成員すべてに平等に公開されている」[2] 教育・文化・情報の機関であり，「住民のための」機関であることは，あらためていうまでもない。「住民によって運営される」というのは，住民の中から選ばれた代表者たちによって図書館運営の基本方針が決定されるということである。イギリスで，この運営の基本方針を決定するのは，地方議会に常任委員会の一つとして設けられる図書館委員会（あるいは図書館を所管する委員会）[3] である。アメリカでは，およそ95パーセントの自治体が図書館理事会 (library trustees) を設置[4]しており，この図書館理事会が図書館に関する政策・方針の決定機関であり，予算要求書もここで決定されたものが議会に送られる。図書館資料の収集・選択方針，施設計画，毎年度の事業計画なども図書館理事会において審議決定し，理事会で決定された事項を図書館長が実行に移すという関係になっている。

このように，図書館を利用する人びとの代表が図書館の管理にかかわるという制度は，いつどこで始まったのであろうか。そして，この図書館理事会は，基本的にどういう役割を果たしてきたのであろうか。

2. チータム図書館

ユネスコの宣言にもあるとおり，住民の代表で構成される管理機構を有するということは，近代公立図書館の特徴の一つであり，近代公立図書館は，発足以来この制度を採用している。実は，近代公立図書館よりも理事会制度の方が歴史が古く，18世紀に誕生した組合図書館 (social library) において，この制度が採られ，近代公立図書館は，その発足にあたって組合図書館以来の伝統を受けついだ[5] ものと考えられる。組合図書館の理事会については次節で扱うが，それと比較対照するために，さきに財団図書館 (endowed library)の一つについて，その管理形態をみることにする。

ケリ (Thomas Kelly) は，チータム[6](Humphrey Chetham, 1580-1653) を「英国におけるパブリック・ライブラリーの最初の偉大な先駆者」[7] とよんでいる。ケリが，ここで「パブリック・ライブラリー」とよんでいるのは，公立に限定されない，「公開図書館」といった意味あいのものである。

チータムは，マンチェスターを根拠地として周辺地域から手広くフェスティアン織などの薄手の毛織物を買い集め，それをロンドン市場で売りさばいた。同時にマンチェスター市内の各地で百貨商を営み，さらに織物製造業を営んで産をなした[8]。

チータムには妻子がなかったが，1651年12月に作成した遺言状によって，彼の死後，相当額の遺産がチータムの親類・友人・使用人に分与された[9]。さらに，チータムは，遺産の一部を基金として二つの社会事業を開始するように遺言で指示していた。すなわち，40名を収容する孤児院の設立と維持のために7,500ポンドを遺贈し，1,000ポンドと慈善事業などのために一部売却した残りの土地を，「学者及び書物に接したいと願っている人びとの利用」に供する図書館の設立に充当する[10]ことを求めていた。

1653年10月12日，チータムは73歳で亡くなったが，すでに生前に指名されていた24人の遺産管理人 (feoffees) が，遺言に書かれた事業の実現にあたることになった。すなわち，この遺産管理人たちが，チータム図書館の管理機構である。遺産管理人が死亡その他で欠けた場合については，周到にチータムが書き残していて，管理人が12人まで減った段階で，残っている人たちが補充すべき12人の管理人を選ぶ。誠実で，こうした役目にふさわしく，マンチェスターから12マイル以内に住んでいることが条件とされる[11]。

創立後約200年を経た1849年に，下院の公共図書館特別委員会に証人としてよばれたチータム図書館のジョーンズ館長 (Thomas Jones, 1819-1875)が，当時の同館の収支状況について報告している。まず，収入はハマートンにある農地の地代500ポンドと，1,050ポンドの株に対する配当(3.25%)が34ポンド2シリング6ペンスで，計 £ 534 2s. 6d. である。それに対して，支出は，館長の俸給が75ポンド，住居費その他が70ポンド，事務員の俸給が12ポンド10シリング，弁護士の報酬4ポンド，図書の保険料が13ポンド10シリング10ペンス，建物(農場内の建物を含む)の維持修理費が年平均249ポンドとなっている。そして，図書館として肝心な新刊書の購入と蔵書の修理に充当できるのは，平均109ポンド12シリング4ペンスであると報告している[12]。「現在の予算は満足すべき状態にあるか」というユアート委員長 (William Ewart, 1798-1869)の質問に対して，ジョーンズ館長は「将来は図書費として150ないし200ポンドを確保したいという希望である」と答えた[13]。

チータム図書館は，創立者の意志によって，当初は図書をすべて鎖で書架につないだ chained library であった。1745年に鎖がはずされたものの，その後も図書の貸出を一切認めない参考図書館 (reference library) であった。しかし，入館して館内で閲覧する分には，入館の際に氏名と住所を記帳するだけで何の制約も設けていない，エドワーズ (Edward Edwards, 1812-1886) が「最も開放的」と賞賛する[14]図書館であった。それでは，当時，このチータム図書館をどういう人びとが利用していたであろうか。

1849年の下院特別委員会におけるジョーンズ館長の証言によれば，当時，チータム図書館は，「夏は9時から5時まで，冬には10時から4時まで開館」[15]して，入館者は「一日平均25人」[16]であった。午後4時ないし5時までの開館では，仕事を持っている人には不便なので，夜間に開館することについてどう考えるかと質問されたのに対して，ジョーンズ館長は，次のように答えている。「約5年前に，たしか8時まで開いたことがあります。非常に多くの人から要望があって，一夏7時か8時まで開館したことがあります。ところが，実際に利用しに来た人は非常に少

なかったので，理事会は夜間開館をやめることにしました。」[17]

夜間に開館しても，実際には利用者が少なかったことの理由としては，第一にチータム図書館の位置のことが考えられる。ジョーンズ館長は，市の中心部からはずれていると証言[18]しており，このことが利用上の障害になっていたであろう。

第二に蔵書の問題がある。チータム図書館は，当初は神学書に偏っていた。しかし，時を経るにつれて次第に選択の範囲が広げられ，1684年には蔵書が約3,000冊に達し，歴史・地誌・法律・科学・医学に関する図書が相当に含まれていた[19]。1791年に，そのときの館長ラドクリフ (John Radcliffe) によって蔵書目録が編集刊行され，これには11,497冊の刊本が登載されている。1826年に目録の補遺が刊行され，これら二つの目録を合わせると，当時の蔵書は14,276冊で，その内訳は次のとおりであった[20]。

神学	3,261
歴史	4,075
法学	681
学芸 (Sciences and Arts)	3,403
文学	2,856

1849年の特別委員会でヴァーニー議員 (Harry Verney) から，「現状では利用者があまり多くないように見受けられるが，市民の利用を促す方策があるか」と尋ねられたのに対して，ジョーンズ館長は，次のように答えている。「私どもの図書館の本は，教育のない人に向くものではないと存じます。理事たちは，創立者の意志にしたがって，ここは学者のための図書館であって，貧者のための図書館ではないと考えております。もし予算がもっとあれば，無学の人に役立つような図書を購入することもできましょう。」[21]

1852年9月にマンチェスター市立図書館が開館するが，開館までに用意された蔵書は，参考部に16,003冊，貸出部に5,305冊，計21,308冊であった。そして，5年後には蔵書が35,887冊となっており，この間の増加冊数は年平均約2,900冊である。それに対して，チータム図書館は1825年から1845年までの20年間に寄贈を含めてわずかに1,250冊，年平均約60冊の増加でしかない。1845年，ジョーンズが館長に就任してからは，蔵書の充実に努め，購入だけで年平均100冊ほど増加する[22]ようになった。それにしても，2,900冊と100冊とでは随分大きな違いである。この増加冊数だけをみても，チータム図書館の専門的な学術図書館という性格が推察されるのである。

エドワーズは，1851年1月から図書館の開設準備にあたり，1858年10月までマンチェスター市立図書館の館長であったが，市立図書館は参考部だけで一日平均250人以上の利用があった[23]と記している。チータム図書館の利用者は，1849年には一日平均25人と報告されたが，市立図書館の開館後は，平均10人以下に減ってしまった[24]という。

以上をまとめると，チータム図書館の理事会は，創立者の遺志を尊重して，その路線で事業を進める執行人であり，理事に欠員を生じた場合，補充すべき人は理事会が選ぶ。その結果，多分に保守的・閉鎖的であり，理事は必ずしも図書館の利用者ではないし，その代表というのでもない。図書館は公開しているが，住民すべてを志向したものではなく，「学者とか研究のためにある種の文献を調べようという人びとのため」[25]の図書館である。

チータム図書館は，要するに豪商の遺産をもとにしてつくられた図書館であり，それは慈恵的

な意図に発しており，その性格は基本的には変わらない。

3．フィラデルフィア図書館会社

18世紀になると，会員制の図書館が出現する。その最初のものがフィラデルフィア図書館会社(Library Company of Philadelphia) である。これは，フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) の発案によって創始されたものであるが，フランクリンは，これにさきだって1727年にジャントーとよばれる討論クラブを組織しており，これがのちの図書館会社とも関係があるので，まずジャントーのことからみていくことにする。

ジャントーは12名の会員から成り，毎週金曜日の晩に会合を開いた。会員は二つのことを義務づけられており，その一つは，会合の折に全員が何か話題を提供することである。「最近に読んだ本の中で，何か紹介に値することがないか」「あなたの知っている人で事業に失敗した人がいないか，その原因は何だと聞いているか」「だれか事業に成功した人がいるか，それはどういう方法で成功したのか」といった世間話に類することも含まれているが，そういう卑近な話題からも何かを学びとろうとする姿勢がうかがわれる。

そして，もう一つは，毎回会員の一人が「自分の好きな題目について論文を書き，それを提出して読む」[26]ことであった。ところで，フランクリンは，このジャントーへの入会に関して，次のように定めている。

会員として認められるには，起立し胸に手をあてて，次の質問に答えなければならない。

1．現在の会員の中に，あなたが敬意を払えない人がいますか。答，おりません。

2．あなたは，職業・宗教にかかわりなく，人類すべてを愛すると宣言しますか。答，宣言します。

3．人は，思想上の見解または信仰の違いを理由に，その身体・名誉・財産に損害を加えられることがあってもよいと考えますか。答，いいえ。

4．あなたは真理のために真理を愛し，それを発見し，人びとに伝えることに努めますか。答，はい。[27]

フランクリンは，ロンドン滞在中に外科医ライアンズ (Lyons) と知りあい，彼の案内でホーンズ亭という居酒屋を訪ねて，『蜜蜂物語』の著者マンデヴィル (Bernard de Mandeville) に紹介されたことがある。マンデヴィルは，この居酒屋でクラブを主宰し，その中心となっていた[28]。ジャントーを構想する背景には，こうした経験があったのである。

さらに，この件に関しては，ロック (John Locke, 1632-1704) からの強い影響が認められる。フランクリンは，16歳ごろにロックの『人間知性論』を読んだということを『自伝』に記しているが，その後，1720年に出版されたロックの論文集 *A Collection of Several Pieces...* を，おそらくロンドン滞在中に入手して読んでいる。このロックの論文集に収められた一編に討論会の会則が示されている。その第2条が入会手続に関する規定で，「入会を希望する人は，会則に同意し，次の質問に対して肯定すると答えた上で，現会員の3分の2以上の賛成が得られなければ入会を許可されない」となっている。入会希望者が受ける質問は次の三つである。

1．職業・宗教にかかわりなく，すべての人を愛するか。

2．人は，だれしも，思想上の見解または信仰の違いを理由に，その身体・名誉・財産に

損害を加えられることがあってはならないと考えるか。

3. 真理のために真理を愛し追求し，それを発見し，人びとに伝えることに努めるか。

ジャントーの会員になろうというときに質問される事項と比較すると，その4問のうち3問は，ロックの会則と同一内容であり，語句までほとんど同じである。フランクリンが，このロックの会則案を参考にしたことは明らかである。実際，フランクリンは，個人で所蔵していたロックの論文集を1732年にフィラデルフィア図書館会社に寄贈しているのである。

フランクリンは，1731年，会員制の図書館をつくろうと考え，自身で会則の草案をつくり，公証人ブロックデン (Charles Brockden) に依頼して定款の形に仕上げた[29]。会の目的は，共同で購入(当時は専らイギリスから輸入)した図書を共同で利用するということであり，そのために会員は最初に40シリングを拠出する。一人一株で，賛同者50人がそろったところで発足する。定款は一人で2株以上保有することを禁じており，平等ということに徹している。図書を毎年追加購入し，図書館を維持運営するために，会員は，最初の出資金のほかに，毎年10シリングの会費を納める。

1732年3月，50人近い賛同者が出資金と初年度の会費を払い込んで資金が集まり，3月末に第一回の注文リストの作成を終えた。そのリストの中に神学書は1冊もなかった。発注されたのは「辞書，文法書，地図帳，歴史，それに科学や農業に関する図書で，それらは若い職人たちの好みと資力に見合ったものであった。それは実用的な図書館であった。」[30]

図書館会社は，はじめ会員宅の一室に設けられていたが，1739年秋，州会議事堂内の一室を借用することが許可され，1740年4月7日，図書館は議事堂の西翼2階の一室に移転した。1742年，総督の認可が得られて，図書館会社は法人となった。この1742年の法人化は，図書館会社の基盤が法的に変更されたことを意味する。それまでは，図書館の資産を株主たちが分有していたのであるが，法人になると，資産は法人に帰属して，個人としての所有権は認められなくなったのである。

この種の図書館を，組織形態によって，株式制の図書館 (proprietary library) と年会費を払い込む会員から成る図書館 (subscription library) の二つに分類する考え方もあるが，実際には，中間的な形態の図書館もあり，截然とは分かちがたい。株式制であるか年会費制であるか，あるいはその併用かにかかわりなく，趣旨に賛同した人びとが金を出し合って共同で経営する図書館を組合図書館 (social library) とよぶ。18世紀には，この組合図書館が徐々にふえていく。ハーディ (C. Dewitt Hardy) によると，「1731年から1780年までにニューイングランドで約51の組合図書館が組織され，そして，1790年から1815年までに532館が追加された。」[31]

4. 権利としての図書館

次に，フィラデルフィア図書館会社の組織と運営をみることにする。図書館会社の運営にあたる役職者として，理事 (Directors) 10名，会計1名と書記1名が置かれた。会員は，毎年5月の第1月曜日に集まって投票を実施し，理事と会計を選出する。書記は，理事会の指名によって任命される。

理事は，毎月一回会合して，図書・備品の購入，予算の執行，新入会員の承認，規則の制定・改訂などのことを協議し決定する。1732年春に発注した図書が，10月にフィラデルフィアに到着

して，理事のひとりグレイス (Robert Grace) が所有する邸宅の一室に収めた。理事会は，会員のひとりで，このグレイス所有の家に寄宿しているティモシー (Lewis Timothy) に，図書館の世話を頼むことにし，理事との間で契約書を交わした。契約の大要は次のとおりである。

水曜日の午後2時から3時までと土曜日の午前10時から午後4時まで開館し，この間は図書館で執務する。市民はだれでも館内で閲覧することができる。貸出は会員に限られ，賠償金額を記入した約束手形とひきかえに，1冊，セットになったものはその1組の図書を貸す。手当として最初の3か月について3ポンドを支払い，以後については協議する。

1733年12月，ティモシーがサウス・カロライナのチャールストンに移って，印刷業を営むことになり，1733年12月10日から翌34年の3月11日まで，3か月間はフランクリンが図書館長の代理を務めた。その間に，重要な変更が二つあった。一つは，1734年1月14日の理事会で，会員でない人でも保証金を預けて少額の借料を払えば，本を借りられるように改めた。[32] この結果，図書館会社は，会員以外にも開かれた図書館になった。

もう一つの変更は，2月11日の理事会で，開館日を週1日に減らすように決定した[33]ことである。水曜と土曜が市の立つ日であったが，一年余りの経験で，貸出利用者は，水曜日にはほとんど来館しないことが明らかになったためである。

図書館の生命は図書である。利用者が読みたいと思う本を備えているかどうかが図書館の盛衰を決定する。それだけに備える図書の選択が重要である。フィラデルフィア図書館会社では，どのように選択が行われたのであろうか。1734年7月15日に開かれた理事会の議事録には，「数人の委員から提出されたリストの中から選択して，発注図書のリストを作成した」[34]とある。また，1738年4月10日の理事会の議事録には，「図書室に掲示をはり出して，次回に注文する図書の選択に関して，理事は一般会員の援助を期待している旨を会員に周知する」ことが決定されたとある。[35] おそらく1740年前後のことと推察されるが，会員の希望図書を聞くために図書室内に投書箱が設けられた。[36] 発注図書の選定は，結局理事会が決めることであるが，理事たちは，その決定にあたって会員の希望を生かすように努力した。

その結果，フィラルデルフィア図書館会社の蔵書構成[37]は，同時代の大学図書館のそれとは大いに異なるものになっていた。図書館が州会議事堂内に移転した翌年，1741年に作成された蔵書目録によると，図書館会社は，創立後10年間に291部を購入した。これらは専ら英語の書物で，英語以外のものは，ラテン語1，フランス語1，スペイン語1の3部にすぎなかった。その当時，ハーヴァード大学図書館の蔵書の約半数が外国語，それも主にラテン語であった[38]のと比較すると，大きな相違であった。

図書館会社の会員たちは，歴史・文学・自然科学に対して強い関心を示していた。10年間に購入した291部の内訳をみると，歴史91部，文学55部，自然科学51部で，これら三つの分野で購入したものの3分の2以上を占めていた。その当時，ハーヴァード大学の蔵書の約3分の2，エール大学では約半数が神学書であった。[39] それに対して，フィラデルフィアで購入した神学書は25部，総数の1割にも達していなかった。

さきに，チータム図書館の基本的性格は慈恵的なものであると述べた。それに対して，フィラデルフィア図書館会社はどうかといえば，これは，決して裕福ではない青年たちが，自分たちの知識欲を充足するために自らの手で経営した図書館であり，「権利としての図書館」ということ

ができよう。総括すればこういうことであるが，いくつかの観点から両者を比較してみよう。

1. 図書館の所有者はだれか。チータム図書館の理事会は，1665年に勅許状を得て法人となった。この財団が，図書館を所有し管理している。それに対して，フィラデルフィア図書館会社は，会員が出資して成り立っており，出資者全員がオーナーである。法人化されてからも，図書館がみんなのものであるという基本は変わらない。
2. 図書館を利用するのはだれか。チータム図書館は，「学者・研究者のために」というのが設立者の意図であり，極めて忠実にこの遺志が尊重されていた。かのエンゲルス (Friedrich Engels, 1820-96) が使用した皮張りのいすが今も残っているという。

   フィラデルフィア図書館会社の利用者は，優先的に会員である。設立当初の会員は，若い職人・商人などが多かった。学者とか聖職者はほとんど含まれていない。そして，借料を払えば，会員以外の市民も利用することができた。
3. 管理運営するのはだれか。チータム図書館の場合は，いうまでもなく財団の理事会である。フィラデルフィア図書館会社では，毎年，会員の中から互選される理事たちが，運営の責任者である。
4. だれが図書を選ぶか。チータム図書館では，図書館長が推薦することもあったが，決定するのは理事会であった。そして，理事たちはマンチェスター及びその周辺に住む一流の人士であった。

   フィラデルフィアでも，購入すべき図書を最終的に決めるのは理事会であるが，会員の希望をとり入れることに努力していた点は，前述したとおりである。いいかえれば，こういう本を読みたいという会員の権利が尊重されていたのである。

いずれの図書館においても，理事会が経営の中心であるが，チータム図書館の理事会は，いわば遺言執行人の立場であり，この理事会の経営意思が図書館の性格を規定している。それに対して，フィラデルフィア図書館会社の理事は，会員の中から互選された会員の代表であり，会員の意思の反映に努力しており，民主的な運営となっている。ちなみに，フィラデルフィア図書館会社は急速に成長し，1851年には蔵書が6万冊に達し，ハーヴァード大学に次いで，合衆国第2位の規模を誇るにいたった。他方，チータム図書館の蔵書は，ジョーンズ館長が下院の特別委員会で19,500冊と報告している。

5．ボストン公立図書館

1849年1月にハーヴァード大学総長の職を辞したエヴァレット (Edward Everett, 1794-1865) は，かねてボストン市に公立図書館ができたときには自分の蔵書を寄贈すると申し出ていたが，1851年6月7日，エヴァレットは寄贈予定の図書の目録をビゲロー市長 (John Prescott Bigelow) に提出した。この目録に添えた書簡で，公教育と図書館の関係について，次のように述べている。民主政治においては，なによりも，教育手段がすべての住民にできる限り平等に提供されることが必要である。これは公費による教育制度によって実現される。ボストン市は，人口に対する割合でみるならば，ヨーロッパのどの都市よりも，学校及び校舎建設に毎年多額の公費を投入している。そのお陰で，われわれの子弟は，男女とも16歳か17歳まで質の高い教育を与えられている。しかし，この機会均等も，学校教育を終える年齢までのことである。学校を終えて後

は，裕福な家庭の子弟だけが，豊富に図書を備えた図書館を利用することができる。経済的に余裕のない人たちは，本がもっとも役立つ時期に，しばしば本から遠ざけられてしまう。

1840年にマン (Horace Mann, 1796-1859) がマサチュセッツ州内の図書館状況を調査しているが，それによると，全図書館の会員の合計が25,705人で，人口のおよそ7分の1であった。[40] すなわち，学校教育は教育の第一段階でしかないのに，学校を終えると，読書から離れてしまう人びとが相当にいる。エヴァレットは，これらの人びとに対する施策の必要を唱えたのである。

> ボストンの誇るべき公教育制度を完成するために，また，現在学校教育を終えるまでは保障されている知的特権を生涯を通じて平等に行使できるようにするためには，学術技芸のさまざまの分野の図書を十分にそろえ，広く市民の調査と勉学のために常時公開されている公立図書館がぜひとも必要である。[41]

ビゲロー市長は，エヴァレットからの書簡を下院議長に送付した。その後，この書簡の内容が公表されたのであろう。このことを知って，ティクナー (George Ticknor, 1791-1871) は，7月14日にエヴァレットに私信を送った。ふたりは，同時期にゲッチンゲンに留学しており，しばらくは接触がなかったが，面識のある間柄である。ティクナーはいう。「ボストンに公立図書館を設立することに関心を持っておられることを知りました。公立図書館，私はそれを市民すべてに開かれた図書館で，適当な規則のもとで，だれでも本を借り出せるものと考えています。あなたの計画もそういうものであると理解します。」[42]

実は，ふたりの考えは，貸出をするかどうかという点において相違していた。エヴァレットの考えた公立図書館は，学芸の各分野の図書を十分に備えて，広く市民の学習と調査の用に供する参考図書館であった。それは館内利用が専らであって，館外への持出しを認める考えはなかった。それに対して，ティクナーが考えたのは，道徳的・知的向上に役立つ通俗書を備えた図書館で，希望の集中する本については複本を用意し，貸出を実施する図書館であった。ティクナーの構想は，エヴァレットにとっては全く意想外のことであった。エヴァレットは，7月26日付の返書で，「新刊の通俗書を手広く貸出すことが公立図書館の特色であるとは，これまでおよそ考えてもみなかった」[43]と述べているのである。

こうした，ふたりの図書館に関する構想の違いは，どこから生じたのであろうか。それは，現状に対する認識の相違にもとづいている。エヴァレットは，1836年から39年までマサチュセッツ州知事を勤め，その在任中の1837年4月に州教育委員会を創設する州法が成立し，マンが初代教育長に就任(1848年まで在任)したのである。そして，エヴァレットは，マサチュセッツの公教育制度は成功したとの自負を持っていた。エヴァレットはビゲロー市長あての書簡で，「われわれは子どもたちに学問の基礎を教え，それ以上は自学自習で書物から有用な知識を習得する力をつけている」[44]との見解を表明している。

それに対して，ティクナーは，学校教育を終えた青年たちの多くが，本を読まないし，読書欲さえ持っていないという状況を憂慮している。そこで，「問題は，読書に対する興味を喚起し，人びとを読書好きにするのに適した手段をととのえることである。学校はしばしばそのことに失敗している」[45]と指摘しており，「いまボストンに必要なのは，読書という趣味を，できる限り深く社会に浸透させる装置である」[46]と，ティクナーは考えた。そして，過去20年間の廉価本の出版傾向をみれば，人びとの読書欲を喚起することは可能であるとみる。安い本の出版というの

は，小説から始まったが，好みが徐々に向上して，最近では，あらゆる方面の優れた著作の廉価版が出回るようになった。そして，中産階級がこれらの本を読むようになっている。ティクナーは，「読書欲は，いったん形成されると，ひとりでに成長していく」[47]という信念を持っていた。そこで，だいじなことは，本を読んでみようという興味を起こさせることである。こういう考えから，ティクナーは「読書という趣味を社会に浸透させる装置」という役割を公立図書館に期待したのである。

1852年5月，シーヴァー (Benjamin Seaver) 市長の提案を受けて，市議会は図書館の理事会 (Board of Trustees) を設置することにした。エヴァレットとティクナーは，学識経験者として理事会に加わることが求められた。しかし，ティクナーは，公立図書館が主として下層階級のためのものであり，その蔵書の大部分を無料で貸出すということでなければ協力しないと回答した。エヴァレットは，ティクナーの主張を十分には理解できなかったが，ティクナーの協力をぜひとも得たいと望んでいたので，その主張を黙認した。5月24日，市長，上院議員2名，下院議員5名と学識経験者5名(計13名)が理事に任命され，エヴァレットが理事会の議長に選ばれた。1852年5月31日，理事会は，エヴァレット，ティクナー，シャートレフ (Nathaniel B. Shurtleff, 1810-1874, 医師，1868-70年ボストン市長)，リード (Sampson Reed) の4人を報告書の起草委員に任命した。1852年7月6日に，起草委員会から理事会に報告書（実際にはエヴァレットとティクナーが分担して執筆したとされる)[48]が提出され，満場一致でこれが承認された。シェラ (Jesse H. Shera, 1903-1982) は，この理事会報告書を，「公立図書館の真の信条を最初に表明した」文書であり，「ここに述べられたことは，その後たびたび反復されたが，これほど明白かつ正確に述べられたことはまれである」[49]と高く評価している。

この報告書で主張されている基本的な見解を要約すると，第一に，「われわれの公教育制度を完成する手段として，大きな公立図書館は，この上なく重要である」[50]という点である。公立図書館が必要とされる理由としては，二つのことが挙げられる。

理由の一つは，知識の獲得である。ボストンでは，学校教育は潤沢な公費で維持されているが，学校卒業後は，自ら学習を続けようとしても，公的にはなんらの施策もとられていない。「公立図書館があれば，学校を終えた青年男女が，広く文化に関する著書，実用的な知識のどの分野であれ，その探究に必要な図書を利用することができる。この豊かで進歩的なボストン市が，立派な公立図書館の設立と維持に適度な援助をしてはならないということがあろうか。」[51]

第二の理由は，情報伝達である。「われわれのような政治的，社会的，宗教的制度のもとでは，情報伝達の手段が可能な限り多数の人に行きわたっていることが極めて重要である」[52]という。広く情報が伝えられることによって，人びとは社会秩序の基本にかかわる問題を理解する。そうした問題は，たえずわれわれの前に現われて来ている。そして，「われわれは，市民として，たえずそうした問題に対する決定を求められている。そして，われわれは，時には愚劣な，時には賢明な決断を下している。」[53] 市民がだれでも自由に利用できる図書館がつくられ，各人がそれぞれに抱えている問題の解決に必要な情報を容易に入手することができれば，より健全で幸福な社会をつくることができるであろう。

公立図書館が必要とされる理由の第一に挙げた「知識の獲得」という問題は，実はエヴァレットが執筆した部分に出てくるのである。そして，公立図書館ができたとき，それを利用するであ

ろうとエヴァレットが想定した階層は，若い技師，建築家，薬剤師，あるいは若い芸術家など，職業上知識あるいは過去の創作活動の成果を必要とする人たちであった。それは，社会の上層に近い，どちらかといえば明るく澄んだ部分である。

ティクナーは，「無償教育を提供しているのと同一の原則に基いて，すべての人に読書が公的に保障されるべきであるということは，疑問をはさむ余地がない。実際，それはすべての人に対する教育 (education of all) の最も重要な部分である」[54]と述べており，継続教育のために無料の公立図書館が必要不可欠であるという考えにおいて，エヴァレットと一致している。しかし，その際にティクナーがより強く意識し注目しているのは，社会の底層に近い，むしろ読書から隔絶されている人びとである。

1848年には，革命や動乱がヨーロッパ各地で続発した。ティクナーは，革命というような急激な変動に対して批判的であり，ニューイングランドには革命運動に信頼をおいている人間は少ないと，ヨーロッパの友人に書き送っている。ニューイングランドでは，「人びとが読み書きするだけの知識もなく，政府や自治体の行動を判定するだけの政治教育を受けていなければ，賢明で実際的な主権者とはなり得ない」[55]ということを人びとが心得ていると自負している。しかし，それと同時に不安があった。1840年代にアイルランドから多数の移民が流入し，それにともなって暴力沙汰と犯罪が急速にふえていることである。1849年にニューヨークで起きた暴動について，ティクナーは，活動的分子の20人中19人までが外国人であったとして，かれらはアメリカ社会の秩序に脅威を与える危険人物であると考えた。これら無知な人びとを教育し，理性的な人間に変え，アメリカ社会に順化させることが急務であった。

こうした現状認識から，新たにつくられる公立図書館が何をなすべきかが決まる。ティクナーの目的は，無知な人びとを含めて，すべての市民を informed citizens にすることにある。

> この目的を達成するためには，これまでに使われたことのない方法をとらなければならない。図書館は，たとえ高等教育を受けた人の要求であっても，正当な要求である限り，それを看過すべきではない。しかし，最優先して考慮を払うべきものは，無償学校の場合と同様，自らの継続教育に必要な，興味深く健全な書物を入手する方法を持たない人たちの要求である。[56]

日常生活においてほとんど書物に接することのない人びとに働きかけるためには，その人たちが最も近づきやすい通俗書，健全なものであれば最近の小説も用意しなければならない。そして，

> 不健全なものを求めるのではない限り，大衆の好みにしたがうことによって，一般的な読書に対する真の欲求を創出することが期待される。そして，図書の保全と矛盾しない方法で，最大限に自由な貸出を許可することによって，青年の間に，家庭の中に，最大多数の市民の炉辺において，この欲求が育成される[57]

ことを望んだのである。公立図書館が民主主義の機関であり，全住民のためのものでなければならないという考えにおいて，エヴァレットとティクナーとは一致していた。しかし，この理念を機能の面に反映させることができたのは，ティクナーであった。[58]

ボストン公立図書館は，1854年，女子高校の2室を仮の館舎として発足した。3月20日に閲覧を開始し，5月2日に貸出を開始してからは一日平均300人の利用者があった。1855年9月から建設にかかった，ボイルストン通りの新しい館舎が1858年に完成し，8月に移転，9月17日から

閲覧を開始した。一階の書庫に収められた15,000冊の目録の完成を待って，12月から貸出を開始した。最初の15か月間に13,329人の市民が登録し，一年間の貸出が179,000冊に達した。これは，15,000冊の貸出用の図書が一年に平均12回利用されたということであり，非常によく利用された。これは，この一階の貸出部にどういう本をおくかということについて，ティクナー理事とジューエット館長 (Charles Coffin Jewett, 1816-1868) の選択が極めて適切であったことを物語るものである。

6．市議会と図書館理事会

ボストン公立図書館を開設するため，1852年5月24日に最初の図書館理事会が任命されたことは，さきに述べたとおりである。この最初の理事会は市議会両院の合同特別委員会に市民代表5名が加わる形で構成された。1852年10月14日，あらためて公立図書館の管理運営 (general care and control) を理事会に託するという市条例が可決された。その際，理事会は，上院議員1名，下院議員1名及び両院議員の同時投票によって選ばれる市民5名，計7名で構成される（任期は1年）ことになった。[59] 市民の中から選ばれる理事は，実際には再任されることが多く，エヴァレットは，亡くなる1865年1月15日まで連続して理事会の議長を務め，ティクナーは，1866年まで15年間理事であった(1865年には議長)。

この1852年の条例によって，理事会は図書館の予算を執行し，利用規則を制定し，館長以外の職員を採用し，その給与を決める権限を与えられた。ただし館長に関しては，市議会が毎年これを任命し，その給与を決定する[60]ことにして，最高の人事権だけは市議会自身の手に留保した。

こうしてアメリカ合衆国最初の公立図書館において，理事会による管理方式が採用された。ボストンには，1807年に創立された株式制の図書館ボストン・アシニアム(1株300ドル)があった。ところで，1852年にボストン公立図書館の理事に任命された13人のうち，10人までがアシニアムの株主であった[61]から，図書館の管理について，ボストン・アシニアムの例に倣うことにしたのは自然の成り行きであった。

1865年に条例の改正があって，館長を任命する権限が図書館理事会に委譲され，館長の給与の決定権だけが市議会に残された。しかし，このように権限を二つの機関に分割することは，将来に問題を残すことになった。1876年12月あるいは1877年の初めごろ，財政緊縮のため，市議会は，図書館の職員約30人の給与を規制する命令を突然に採択した。その結果，ウィンザー館長 (Justin Winsor, 1831-1897) の給与が，77年5月1日以降，年3,600ドルから3,000ドルに引き下げられることになった。ウィンザーは，1868年にジューエットが急死したあと，館長に就任し，75年までに市内6か所に分館を設け，ティクナーが望んだ大衆化の方向で図書館の発展を図ってきた。その結果，1868年には175,727冊であった年間利用冊数が，10年後には114万冊を超えるほどに飛躍的な伸びを示した。ウィンザーはボストン公立図書館の名を高め，またその経営手腕が高く評価された。そして，1876年10月に創設されたアメリカ図書館協会の初代会長(1885年まで在任)に選ばれていた。

突然に図書館職員の給料を減額しようとする議会の措置に対して，図書館理事会は強い疑義を抱いた。図書館に配当される予算の総額をおさえるというのであれば，それは議会の権限に属することであって，何の異論もなかった。しかし，予算の使途の詳細を知らない議会が，いきなり

人件費を抑制しようという行動に出て，しかも全体として減額されるという姿の中で二人だけは昇給するという不見識な内容の干渉であったから，非常に問題であった。図書館の監査委員会(理事1名と市民5名で構成)は，1877年5月にまとめた報告書で，図書館長の職務内容及び業績に比して，また市の幹部とくらべても，館長の待遇が不当に低いと指摘した。[62] 当時，市長・収入役は年俸5,000ドル，技師長は4,500ドル，助役が4,000ドルであった。

たまたま1877年5月に，36年勤続したハーヴァード大学の図書館長が退職するということがあり，ウィンザーは，エリオット総長 (Charles William Eliot, 1834-1926) からハーヴァードの図書館長に就任しないかという招請を受けた。この地位は教授級で，年俸は4,000ドル，それに長い夏の休暇があるという魅力のあるものだった。

このことを知った図書館理事会は，市議会に対して，1877年5月1日にさかのぼってウィンザーと年俸4,500ドル以内で5年間の契約を結ぶ権限の付与を求めた。7月2日に，上院はウィンザーの年俸を4,500ドルに増額する件を10対2で可決した。下院は，7月5日にこの議案を満場一致で可決した。しかし，ウィンザーの昇給は5月1日にさかのぼらずに，議会の議決後から実施されることになった。どこで修正されたかという点については記録が残っていないので，正確なことは判明しないが，おそらく上院における審議の過程で原案が修正されたのであろう。金額としては些少であるが，この一件で，ウィンザーの市当局に対する信頼は崩れ去った。ウィンザーは，はじめはボストンにとどまりたいという考えであったが，その決意を変えた。7月11日，ウィンザーはエリオット総長に受諾する旨を回答し，9月1日，ハーヴァード大学図書館長に就任した。

ウィンザーがボストン公立図書館を去ることになったのは，単なる金銭の問題ではなく，図書館長の専門職性 (professionalism) を認めようとしない無知に対する憤りからであった。7月2日，上院でウィンザーの昇給案が審議された際に，オーブライエン議員 (Hugh O'Brien) が次のように発言した。

> ウィンザー氏が貴重な人材であり，その職務の遂行に関して有能であることを疑うものではない。しかし，この地位に適した人がウィンザー氏しかないかどうかは疑問である。ウィンザー氏は館長の地位にあって修練を積んだのであって，そろそろその機会をほかの人に与えてもよいと考える。……数週間の経験を積めば，ウィンザー氏と同程度にその職務をはたし得る市民が数百人はいると思う。ウィンザー氏がハーヴァード大学から招請を受けているのであれば，そちらに行ったらよろしい。[63]

さらに，ロビンソン議員 (Richard Robinson) は，次のような原則論を述べた。

> 私は自分の蔵書を持っており，公立図書館を必要としないので，図書館は一度しか訪ねたことがない。ところで，私は本の目録をつくるのに，何か特別な資格が必要だとは考えていない。その人なしにはやっていけないほど，ある人が市にとって貴重な存在になったときは，なるべく早くその人が市から去ることが，市にとってベターであるというのが，私が日ごろ考えていることである。[64]

ウィンザーの友人のひとりは，のちにウィンザーのことを回想して，「彼は寛大な性格であったが，卑劣な行動に対しては極めて敏感であった」[65]と記している。結局，ウィンザーは，政治家たちの無責任な，ためにする言論の渦中から逃れて，ハーヴァード大学に移った。その結果，

ボストン公立図書館は第一級の傑出した図書館長を失った。そして，ホワイトヒルの言によれば，「ボストン公立図書館は荒野にさまよい出て，18年間そこから脱出できなかった」[66]のである。

ウィンザーがボストンを去った翌年，パース (Henry L. Pierce, 1825-1896) が市長に就任すると，彼は，公立図書館の安定した管理の持続を保証するために，州法の制定を求めることにした。州法の制定というのは，すでに前年の7月に，*Library Journal* の社説で提案された解決策でもあった。結局，マサチュセッツ州1878年法律第114号(同年4月4日施行)によって，ボストン公立図書館理事会が法人化された。理事会は，上院議員1名，下院議員1名と市民の代表5名，計7名で構成される。市議会は，毎年1月(1878年に限り4月)に，図書館理事を兼務する議員を互選する。市長は，議会の承認を得て一般市民の中から5名の理事を任命し，最初の5名の任期は，それぞれ5年，4年，3年，2年，1年とする。1879年以降，毎年4月に，市長は議会の承認を得て市民の中から1名の理事を任命し，その任期は5年である。理事会は，毎年5月の第1月曜日の会合で議長を互選する。

理事会は，図書館の管理運営に責任を有し，予算執行，利用規則の制定などを行うことは従前どおりであるが，新たに館長を含む全職員の人事権が理事会に与えられた。すなわち，理事会は館長をはじめ職員を任用し，その給与を決定できるようになった。ただし，人件費の総額は，市議会が決めた額を超えることはできない。

この州法の成立によって，館長の地位・待遇が市議会の意向によって左右されることはなくなり，公立図書館は，組織としての自律性を確保できるようになった。公立図書館の管理運営を理事会に託するというアメリカの伝統は，ボストンから始まったのであるが，1877年の事件を契機にして，「ボストンは，図書館理事会の実質的な独立とその権限の拡張を伝統の一部として追加した」[67]のである。その後1885年に市の憲章が改正されて，市議会議員は市の執行機関 (executive boards) に加われないことになった。[68] その結果，図書館理事会の定数は5名となり，そのまま現在まで続いている。図書館理事会に関する1878年法は，細部における修正はあったが，その基本においては全く変更がない。

7. む す び

公立図書館の設立，その館舎の建設，あるいはその年間予算などを決定するのは市議会であり，市議会は，公立図書館の基盤的な部分にかかわっており，そのことに関して第一義的な責任を有している。ところが，図書館の実際の管理運営のためには，理事会という制度が導入された。これは，ある意味で二つの頭を持った姿であり，議会と理事会との間の衝突がおこるのは，ほとんど不可避のことであったといえよう。ジョッケルは，ボストンにおける「最初の25年間は，一言でいえば，図書館理事会が，議会の支配からの独立を勝ちとる戦いの歴史であった」[69]と述べている。そして，1878年の州法で，ボストンの図書館理事会は，ほとんど完全な独立を獲得したのである。

現在アメリカでは，大多数の公立図書館が，その管理機構 (governing body) として図書館理事会を置いている。理事会制度に対する批判がない訳ではない。行政機構が複雑になるとか，理事会がなければ専門的知識と経験の豊かな館長がその能力を十分に発揮できるとか，市役所の一部局として市長に直属した方が発展の速度が速いといった批判である。実際，図書館理事会を廃

止した市もある。しかし，それは少数である。大多数の市が図書館理事会を維持しているということは，「理事会による管理方式が，みごとに図書館に適している」[70]ことの証左であり，今後も理事会は存続していくであろう。

さて，この図書館理事会という制度はどのように評価されるであろうか。これまでに，しばしば利点として挙げられたのは，図書館理事会が，政治(市長・議会・政党など)に対して緩衝装置の役を果たしているという点である。たとえば，1952年9月，ボストン公立図書館が『ボストン・ポスト』紙から攻撃を受けたとき，ボストン市長は共産主義の図書に特別のラベルをはることを提案し，市会議長は共産主義関係の資料を図書館が購入し利用に供することに強く反対した。しかし，図書館理事会は，同年10月3日，「現代の国際的，国内的，地方の問題や争点に関して，さまざまの立場の資料が市民の利用に供されなければならない。図書館理事会は，何を読むべきであるとか，何を読んではならないと市民に指示する権利を持たない」という主旨の決議を採択して，図書館長の立場を支持した。もし図書館理事会がなければ，図書館長は，市長の指示に従うか職を賭してたたかうか，いずれかの道しかなかったであろう。図書館理事会があることによって，図書館は公正な立場を貫くことができ，後世に汚名を残すことがなかったのである。もちろん，理事会があっても政治的圧力を防ぎ止められなかったケースもある。しかし，総じていえば，理事会が存在することによって，図書館の被害が少なかったとみることができる。[71]

次に，積極的な面であるが，予算要求とか補助金の申請などの際に，行政とか議会，議員個人と交渉するのは，図書館理事の重要な働きの一つである。[72] 前節で，理事は市民 (citizens) の中から任命されるというようにしばしば書いたが，その「市民」というのは，実際には，日本でいう「学識経験者」に相当すると考えてよいであろう。ジョッケルが，図書館理事(回答者683人)の職業を調査した[73]ところ，弁護士 (112人)，教授・教員(64人)，医師(30人)，聖職者(28人)，ジャーナリスト(20人)などの専門職が43%の多数を占め，そのほか工場主(52人)，商店主(38人)，銀行家(32人)などを含めると，60%以上がその土地の名士である。この人たちは，その多くが地方政治家，地元選出の議員たちのだれかと面識を持っているのであろう。この人たちの政治的接渉が，館長一個人による交渉よりも，多くの場合に成果を挙げるであろうことは想像に難くない。

第三に，図書館理事会が，図書館長を採用する権限を持っていることの意義は大きい。館長ポストが空席になった場合，図書館の将来の発展は，理事会が有能練達な人材をその人にふさわしい待遇で館長として招き得るかどうかに依存することが大きい。館長以外の幹部についても同様である。理事会がこの点を十分に認識し，館長として優秀な人を得た場合に，図書館サービスが発展し，地域社会の中により根強く定着するようになったことは，すでに多くの事例が証明している。

第四に，理事会と図書館長との間の息の合った協働関係によって，図書館の発展が図られる。理事会の機能は policy making であるとされるが，現実には，多くの場合に計画の原案は館長以下の職員によって作成され，それが理事会に提出される。その原案の実現可能性を検討し，必要があれば手直しをして，計画を地に足のついたものにするのは，理事会の任務である。そして，多少の困難が予想されても，計画がいったん理事会で承認されれば，その計画の実現に向けて，地域の人びとに説明して，その理解と支持を得るのは理事たちの務めである。

最後に，選ばれて理事会の構成員となることによって，その人は，市民としての責任を自覚し

体得する機会を得る。

わが国の公立図書館に図書館理事会の制度をそのまま導入することは，国情及び歴史の相違もあって容易ではないし，必ずしも適切な選択とはならないであろう。しかし，アメリカにおける理事会制度の発展及びその役割・機能から汲むべきもの，学ぶべきことは決して少なくはない。

注

1) Unesco. Public library manifesto. 1949.
2) *ibid.*
3) イギリスの図書館委員会については，次を参照されたい。
森耕一　『公立図書館原論』全国学校図書館協議会　1983. p. 178-80.
4) Alex Ladenson, *Library Law and Legislation in the United States* (Metuchen, N. J.: Scarecrow Press, 1982), p. 31.
5) Jesse H. Shera, *Foundations of the Public Library* (Chicago: University of Chicago Press, 1949), p. 180.
6) 1965-66年にこの図書館を訪れた武居良明氏が「チータム」と表記しているので，それにしたがった。マンチェスターの図書館『社会経済史学』32巻3号(1966)
7) Thomas Kelly, *Early Public Libraries* (London: Library Association, 1966), p. 77.
8) 武居　前掲論文 p. 73.
9) Edward Edwards, *Memoirs of Libraries* (London, 1859), Vol. I, p. 634.
10) Kelly, *op. cit.*
11) Edwards, *op. cit.*, p. 637.
12) Select Committee on Public Libraries, *Report* (1849), Q. 1102-1106.
13) *ibid.*, Q. 1110.
14) *ibid.*, Q. 146-148.
15) *ibid.*, Q. 1116.
16) *ibid.*, Q. 1112.
17) *ibid.*, Q. 1129-1130.
18) *ibid.*, Q. 1190-91.
19) Kelly, *op. cit.*, p. 79.
20) Edwards, *op. cit.*, Vol. I, p. 649-51.
21) 1849 *Report*, Q. 1158.
22) *ibid.*, Q. 1180.
23) Edwards, *op. cit.*, Vol. I, p. 655.
24) *ibid.*, p. 656.
25) 1849 *Report*, Q. 1176.
26) 『フランクリン自伝』　松本慎一，西川正身訳　岩波書店　1957（岩波文庫）p. 96.
27) Leonard W. Labaree, ed., *The Papers of Benjamin Franklin* (New Haven: Yale University Press, 1959-), Vol. 1, p. 258-59.
28) 『フランクリン自伝』 p. 69.
29) 同上，p. 112-13, 128.
30) Margaret Barton Korty, Benjamin Franklin and Eighteenth-Century American Libraries. *Transactions of the American Philosophical Society*. New Series, Vol. 55, Part 9 (1965), p. 8.
31) Oliver Garceau, *The Public Library in the Political Process* (New York: Columbia University Press, 1949), p. 16. 本書の第1章は C. Dewitt Hardy の執筆に成る。
32) Korty, *op. cit.*, p. 9.
33) *ibid.*, p. 9-10.

34) Edwin Wolf 2nd, "Franklin and his Friends choose their Books" in *An American Library History Reader,* selected by John David Marshall (Hamden, Conn.: Shoe String Press, 1961), p. 19.
35) *ibid.*
36) Edwin Wolf 2nd, *At the instance of Benjamin Franklin* (Philadelphia: Library Company of Philadelphia, 1976), p. 5.
37) 詳細は，次の文献を参照されたい。
小倉親雄　フランクリンとフィラデルフィア図書館会社『図書館界』11巻(1959)，p. 107-15.
川崎良孝　公共図書館成立への思想的起源　『図書館界』27巻(1976)，p. 91-106.
38) Wolf (1961), p. 25.
39) Wolf (1961), p. 21.
40) Garceau, *op. cit.,* p. 19.
41) *Proceedings on the Occasion of Laying the Cornor-Stone of the Public Library of the City of Boston, 17 September 1855* (Boston: Moore & Crosby), p. 48-49.
この文献は，川崎良孝氏の好意で閲読することを得た。
42) Walter Muir Whithehill, *Boston Public Library: a Centennial History* (Cambridge: Harvard University Press, 1956), p. 23.
43) *ibid.,* p. 25.
44) *Proceedings* ..., p. 47.
45) Whitehill, *op. cit.,* p. 24.
46) *ibid.*
47) *ibid.*
48) *Report of the Trustees of the Public Library of the City of Boston* (Boston, 1852)
49) Shera, *op. cit.,* p. 181.
50) 1852 *Report,* p. 9.
51) *ibid.,* p. 8.
52) *ibid.,* p. 15.
53) *ibid.*
54) *ibid.*
55) Michael H. Harris and Gerard Spiegler, Everett, Ticknor and the Common Man. *Libri,* Vol. 24 (1974), p. 261.
56) 1852 *Report,* p. 16.
57) *ibid.,* p. 17.
58) Shera, *op. cit.,* p. 219.
59) *ibid.,* p. 180.
60) *ibid.*
61) Carleton Bruns Joeckel, *The Government of the American Public Library* (Chicago: University of Chicago Press, 1935), p. 20.
62) Whitehill, *op. cit.,* p. 105.
63) Wayne Cutler and Michael H. Harris, eds., *Justin Winsor: Scholar-Librarian* (Littleton Colo.: Libraries Unlimited, 1980), p. 29.
64) Whitehill, *op. cit.,* p. 107.
65) Cutler and Harris, *op. cit.,* p. 28.
66) Whitehill, *op. cit.,* p. 109.
67) Joeckel, *op. cit.,* p. 22.
68) Whitehill, *op. cit.,* p. 112.
69) Joeckel, *op. cit.,* p. 21.
70) *ibid.,* p. 261.

71) わが国の場合，図書館理事会という制度はないし，教育委員会があっても，それが緩衝的な役割を果たすことはほとんど期待できない。

72) Virginia G. Young, ed., *The Library Trustee: a Practical Guidebook*, 3rd ed. (New York: R.R. Bowker, 1978), Chapter 14: The Trustee and the Political Process.

73) Joeckel, *op. cit.*, p. 239-40.
最近の調査でも弁護士が最も多く，図書館理事の職業分布は大きくは変わっていない。
Ann E. Prentice, *The Public Library Trustee: Image and Performance on Funding* (Metuchen, N.J.: Scarecrow Press, 1973), p. 46.

(本学部教授)